

Japan Railfan Club

鉄道友の会 福井支部報

轍

～わ だ ち～



(▲2016年8月26日 えちぜん鉄道 勝山～比島駅 撮影 森家 和治)
えちぜん鉄道 「きょうりゅう電車」運転中！

2016.9月号

No.168

福井支部 ホームページアドレス

URL http://www.geocities.jp/railfan_fukui/

『ふくいの鉄道160年』こぼれ話 (5)

渡邊 誠

第3章 北陸線の県内区間全通と三国線

(つづき)

— 鉄道唱歌四題 —

「♪汽笛一声新橋を はや我汽車は離れたり…」の鉄道唱歌は、読者諸兄もよくご存じかと思う。これもいろいろ調べていくと、歌詞もメロディも異なる複数の鉄道唱歌があるようだ。

〔1〕元祖・鉄道唱歌 -明治33年-

“元祖”は筆者がいま勝手に名付けたのだが、筆者のような世代には、国鉄時代の電車急行(薄給の身で特急には乗れなかった)や、“0系”などという言葉もなかった時代の新幹線での車内チャイムだったことが懐かしい。

実はこれ以前にも鉄道路線を題材にした歌は、明治26年(1893)『鉄道線路レールエー節』をはじめいくつか出ているのだが、世に広く知られ渡ることなく、これを事実上の“元祖”ととらえて大きな間違いはあるまい。

“元祖・鉄道唱歌”は明治33年(1900)5月、大阪・本町の三木書店から『地理教育鉄道唱歌』と題して発売された。全国各幹線の沿線を七五調四句に唄ったものだ。現在の東海道本線を第1集として、9月に山陽・九州地方の第2集を、10月に第3集で東北地方、第4集北陸地方、第5集畿内および隣邦と、矢つぎばやに出版され、1000万部を超えるベストセラーとなった。のちに北海道編が追加されて全6集とされている。

作詞したのは、国文学者で東京大学古典講習課や東京高等師範学校(のちの東京教育大学、

現・筑波大学)で教鞭をとった大和田建樹。

作曲は、第1集・第2集が多梅稚と上眞行、第3集が多梅稚と田村虎蔵、第4集が納所辨次郎と吉田信太、第5集は多梅稚と目賀田満世吉いったように、各曲に2つずつつけられた。すなわち、一つの歌でありながら旋律はいくつもあるのである。このうち昭和・平成まで残った「♪汽笛一声」は、その頃大阪師範学校教諭でのちに東京音楽学校(現・東京芸大)教授となった多梅稚の作品である。

今年1月14日、FM福井が本書を取り上げてくれることになり、CDを持ち込み第4集北陸編のうち県内部分を掛けてもらったのだが、こちらは学習院助教授・納所辨次郎の曲である。このため「♪汽笛一声」とはやや趣が異なり、違和感を抱かれた諸兄も多かったことかと思う。

いささか旧聞に属するが、昭和42年(1967)、翌年に福井国体が開かれるのを前に、県の国体実行委員会と国体県民運動推進協議会との共催で、『歌のしおり』が県民に配布されている。そこには「イッチョライ節」や「あゝ北の庄」などともに鉄道唱歌北陸編の63番あたりが掲載されている。それはそれで良いのだが、楽譜が何と「♪汽笛一声」のものになっている。これは違うのだ。当時の県職員が十分な推敲・校正をしないまま発行してしまったのだろうか。

大悟法利雄著『なつかしの鉄道唱歌』によると、最初に広く普及した曲に魅了されてしまった人は、新しい曲に一種の拒絶反応を示すようになるもので、同じ歌にいくつも曲があっても人々には定着しないのである。詩は

県内に入っすぐ、細呂木の枕詞「こころ」は何を意味するのだろうか。金津の「いろは」とは？ 筆者に文学的才能ゼロであることが露見する。

三国線はまだ開通していないが、三国まで立ち寄ったのであろうか。いや、川が三国に注ぐという意味か。

その川、「日野川こえて福井駅」は、明かに九頭竜川の間違ひである。「だがこれは歌詞の韻の調子からやむを得ず、語調の良い日野川を選んだのだと好意的に解釈したい」と、初代支部長・辻川利雄氏は『わだち』4号(昭和42年5月)で記している。

[2] 2度目の鉄道唱歌 -明治42年- 晩年の大和田建樹は明治42年(1909)、

大阪の昇文館から『東海道唱歌汽車』、『山陽線唱歌汽車』、『九州線唱歌汽車』の3部作を出版した。東京から鹿児島まで合計156節からなる大作で、のちに“2度目の鉄道唱歌”と呼ばれるようになった。

引き続き東北や北陸も巡るつもりであったのであろうが、翌明治43年(1910)10月、建樹は54歳で東北・北陸どころか、永久の旅に就いてしまった。

[3] 新鉄道唱歌(鉄道省編) -昭和3年-

昭和3年(1928)1月20日、東京日日新聞(現・毎日新聞)朝刊に大きな広告が載った。

新鉄道唱歌募集 (原文は縦書き)

新しい「汽笛一声」
子供の口から歌はれる
昭和新時代の鉄道網

明治の鉄道唱歌が作られたころの鉄道網は3000マイル(4800km)を出ないきわめて狭小

鉄道唱歌 北陸編

明治33年10月

上野 高崎 直江津 沼垂 富山 米原
(直江津 富山間当時未開通)

作詞 大和田建樹
作曲 納所弁次郎

六二

折りたく柴の動橋
武士が帯びたる大聖寺
こころ細呂木すぎゆけば
いろはの金津むかへたり

(細呂木)

(金津)

六三

三國港の海に入る
日野川こえて福井驛
こゝに織り出す羽二重は
輸出の高も數千萬

(福井)

六四

大土呂 鯖江あとにして(大土呂)鯖江
武生 鯖波はしりゆく (武生)鯖波
汽車は今こそ今庄に (今庄)
つきて燧の城も見つ

六五

海のながめのたぐひなき
杉津をいでてトンネルに(杉津)
入ればあやしやいつのまに
日はくればはてて暗なるぞ

六六

敦賀はげにもよき港
おりて見てこん名どころを
氣比の松原氣比の海
官幣大社氣比の宮

(敦賀)

六七

身を勤王にたふしたる
耕雲齋の碑をとへば
松の木かげを指さして
あれと子供はをしえたり

六八

正田 柳瀬 中の郷
すぎゆく窓に仰ぎ見る
山は近江の賤ヶ嶽
七本鎗の名も高し

(正田)

何十編とあってもみな同じ七五調だし、1節は4句からなっているので、どれも「♪汽笛一声」の節で歌われることに事実上なってしまったようだ。

50余年前の県職員の名誉のために言っておくと、決して県職員が誤ったわけではなく、九州編も北陸編もみな「♪汽笛一声」の節で歌われていたとのことである。

さて、第4集北陸編の歌詞だが、上野を出て高崎、長野、直江津、長岡を経て新潟(上越線は当時まだない)。新潟から船で佐渡へ寄り道し、佐渡からはいったん直江津に寄港して富山に上陸している(富山-直江津間も当時未開通)。富山から北陸線を金沢、福井、敦賀と進み米原に至っている。

このうち本県に関係する63番から68番までをここに紹介する。当時をしのんでもらうため、原文どおり旧漢字、歴史的仮名遣いで表してみた。

なもので、1万マイル(16000km)に達した昭和初期と比較すると、長さや広さで雲泥の差があるばかりでなく、路線の変更や駅名の改廃などがあって、旧態一新の有様であった。同新聞社は交通知識の啓発と普及に意を注ぎ、昭和新時代の交通組織をあまねく天下に紹介する目的から「新鉄道唱歌」を募集したのである。

北原白秋、野口雨情らが審査に当たり、入選発表は6月になってからであった。

入選した歌詞は、第1区東海道線が東京の藤原守人、第2区北陸・信越・羽越線が長岡の大井知光であった(第3区以下は省略)。曲は、静岡の美和充が入選した。

昭和4年(1929)に入り、「新鉄道唱歌」の歌本が刊行されたが、作詞・作曲は鉄道省とされ、のちに「鉄道省編・新鉄道唱歌」と呼ばれることになった。名前はいただくのが“官”の習わし?

このころ、ビクター、コロムビアが創立されて2、3年経っているが、日東蓄音器会社(ツ

バメ印)から「新鉄道唱歌」10枚組レコードが発売された。

第1輯 東海道線の1番は、
新たに興る大御代の

昭和の春の朝ぼらけ

汽笛はひびく宮城の

松の翠にこだまして

と、昭和天皇の即位を寿いでいる。

第2輯北陸・信越・羽越線は米原を出発し、小浜線と七尾線に立ち寄り秋田へ向かう。

米原→敦賀港→高浜→敦賀→金沢→津幡
→七尾→和倉→津幡→直江津→柿崎→柏崎
→長岡→新津→新潟→新津→村上→秋田

新鉄道唱歌 第六輯

北陸・信越・羽越線 昭和4年

作詞 大井知光・作曲 美和充

3

七本槍の名も著るく

歴史に残る賤ヶ岳

語り傳へていく旅も

いつしかこゝ敦賀港

(敦賀港)

4

出船の汽笛勇ましく

浪路曳くや零の跡

行手は遠し浦鹽の

潮風なごむ新航路

5

宮の御運のつたなくて

足利勢に破られし

6 城の松風延元の
昔を語る金ヶ崎

立石岬右に見つ

敦賀を出する小濱線

海につらなる三方湖や

蘇洞門の勝を探らん

(小浜)

7

島かげ清き高濱の

海も車窓に近づくや

新舞鶴の要港に

行き交ふ艦の敷しげし

8

再び敦賀に歸り来て

北を指しゆく本線の

杉津の眺め一入に

汽車は木芽の岬越え

(敦賀)

(高浜)

(敦賀)

9 忠臣新田義貞の

勲はかほる足羽山

武生鯖江を過ぎゆけば

昔聞こえし北の庄

(福井)

10

福井に近き永平寺

曹洞宗の本山に

詣つる人の絶え間なく

法燈いまに影さやか

11

三國線路の岐れ路

金津もすぎて大聖寺

柴山湯も繪に似たる

窓のながめに動橋

(金津)

新鉄道唱歌 第六輯

へ調

♩ = 96 軽快に 作詞・作曲 鉄道省

mf (やや強く)

10 ふくみにち~かきえいへいじ
(い)

f (強く)

そうどうし~うのほんざんに
(しゅ)

mf (やや強く)

まうづ~るひとのたえまなく
(も) (ず)

ほふとうのいまにかけさやか
(う)

新鉄道唱歌 第六輯

北陸・信越・羽越線 昭和4年

作詞 大井知光・作曲 美和充

3 七本槍の名も著るく
歴史に残る賤ヶ岳
語り傳へていく旅も
いつしかこゝ敦賀港
(敦賀港)

4 出船の汽笛勇ましく
浪路曳くや零の跡
行手は遠し浦鹽の
潮風なごむ新航路

5 宮の御運のつたなくて
足利勢に破られし

6 城の松風延元の
昔を語る金ヶ崎
立石岬右に見つ
敦賀を出する小濱線
海につらなる三方湖や
蘇洞門の勝を探らん
(小浜)

7 島かげ清き高濱の
海も車窓に近づくや
新舞鶴の要港に
行き交ふ艦の敷しげし

8 再び敦賀に歸り来て
北を指しゆく本線の
杉津の眺め一入に
汽車は木芽の岬越え
(敦賀)

9 忠臣新田義貞の
勲はかほる足羽山
武生鯖江を過ぎゆけば
昔聞こえし北の庄
(福井)

10 福井に近き永平寺
曹洞宗の本山に
詣つる人の絶え間なく
法燈いまに影さやか

11 三國線路の岐れ路
金津もすぎて大聖寺
柴山湯も繪に似たる
窓のながめに動橋
(金津)

このうち本県関係の歌詞と譜面をここに紹介する。

ここでまたまた文学のみでなく、音楽的才能もゼロの恥をさらす。楽譜など全く読めない。レコード、CD も再販されているとは聞かない。どなたか例会で歌ってみていただけないだろうか。

〔4〕新鉄道唱歌(NHK編) -昭和12年-

昭和11年(1936)6月、NHKは毎週月曜から土曜まで午後0時35分より5分間、平易で健全な明るい歌「国民歌謡」を週替わりで放送し始めた。もちろんラジオ番組の話である。

「椰子の実」、「夜明けの歌」、「めんこい子馬」などがここから出ている。

放送開始1年後には鉄道省編とはまた別の「新鉄道唱歌」が取り上げられた。作詞は土岐善磨、西条八十、佐佐木信綱、与謝野晶子、土井晩翠、相馬御風ら平成の今日に至るまで名を残している面々、作曲は鉄道ファンとして有名であった堀内敬三であった。

時代はEF55、C53 43、キハ45000、モハ52等々の流線型が一世を風靡する一方、日中間の緊張が重くのしかかってきたころでもあった。国民歌謡はそんな時代背景を見事にとらえつつ、他の鉄道唱歌と同様に東京駅から東海道を下るところから始まる。

帝都をあとに颯爽と

東海道は特急の流線一路

富士桜燕の影も麗らかに

全国各地をめぐって北陸にたどり着いたのは昭和13年(1938)11月放送分であった。

北陸線部分は相馬御風が詩を書き、作曲は杉山長谷雄で、直江津に始まり金沢で終わっている。

- ① 日本海の沖遙か ほのかに浮ぶ佐渡ヶ島
直江津出て荒波の 岩打つ断崖道嶮し
- ② 名立崩れの古語り 聞つつ何時か糸魚川
ここより登る白馬の 高嶺は夏も雪光る
- ③ 天下の難所親不知 芭蕉を偲ぶ市振や
分入る右は有磯海、夢か現か昼気楼
- ④ 黒部の川の谿深く 霊山大刀の嶺高し
薬都富山の賑いや 神通の流れ水豊か
- ⑤ 岩瀬伏木は良き港 銅器漆器に名も高さ
高岡過ぎて砺波野や 俱利伽羅峠程近し
- ⑥ 想いは遠し玉くしげ 二上山を今も見つ
山の彼方は萬葉の 歌の昔の跡所
- ⑦ 古九谷焼の美しき まぼろし胸に描きつつ
北陸一の文化都市 金沢市にぞ早着きぬ

金沢-米原間が残されなかった理由は分からない。盧溝橋に始まる戦局が障害となったのであろうか。『わだち』3号(昭和41年4月)で阪神支部の小倉文夫氏は、次のように記している。



当時ホンの子供だった私は、父から「汽車の歌」としか教わらず、「ヘルメス」並四球のオンボロラジオから流れるメロディーだけを覚えていたものである。段々軍国調になる時代で「愛国の花」や「くろがねの力」の方が軍の圧力で流行し、ついには山陽特殊鋼の「喰い逃げ専務」が作詞したと言われる「愛国行進曲」などに喰われて「新鉄道唱歌」は消えて行った。

以下次号

参考文献

- 『なつかしの鉄道唱歌』大悟法利雄 昭和44年 講談社
- 『新鐵道唱歌』鉄道省偏(復刻版) 昭和62年 国書刊行会
- 『鉄道唱歌(贈呈版)』岡本仁 平成11年 野ばら社